

聖ヨゼフ病院

患者を、街を見守った 弓なりのモダン建築



湾曲した聖ヨゼフ病院の旧棟
早世した詩人で建築家の立原ヨ
シヨも設計に関わった。廊下の小さ
な換気口がアクセントだ
写真：横須賀市報が正

神奈川新聞アーカイブズ
総天然色 58
2020

●文・写真＝斉藤大起●



谷あいの狭い坂道を上ると、1939年に完成した4階建ての鉄筋コンクリート建築が変わらずそびえていた。建物全体がパウムクレーンを切り分けたように弧を描き、下から見ると広角

レンズ越しに見たように面影を浮かべている。訪れた人を迎え入れるようだ。今年4月の本欄で外観を紹介した横須賀市緑が丘の聖ヨゼフ病院。今回、その内部を撮影する機会に恵まれた。



①女子を抱いたヨゼフ像。屋上から横須賀の街を見守り続けた②外壁の一部には当初のものとみられるタイルが残っていた



▶モダンで明るい階段室。白い壁が清潔感を醸す
▲湾曲した廊下に並ぶ病室。明かり取りの窓が外光を取り入れる

太平洋戦争前の病院建築は全国的にも現存例が少ない。この建物もこの春、隣接地にできた新棟に役目を譲り、今は解体を待つばかりとなっている。湾曲した病棟は1階が診察室、2階以上が病室などで、中央の廊下を挟んで左右に部屋が並び、その廊下は緩やかな曲線を描き奥へと続いている。弧に沿った病室だけに、部屋の床面は台形に近く、直角はない。

窓側の壁の下部には、埋められた換気口の跡が残っていた。廊下とを隔てる壁には、すりガラスの入った明かり取りの窓がある。自然通風、自然採光が当たり前だった時代の名残だ。換気口の跡は外から見るとよりはっきり分り、窓下にすらりと並んで外観のアクセントになっている。

弓なりの建物の端に位置するナースステーションからは、反対側の端までよく見渡せる。カーブに差し掛かった列車の窓から先頭が見えるような感じだ。英国の功利主義者ジェレミ・ベンサムや、フランスの思想家ミシェル・フーコーが言及した円形建築パノプティコンに通ずる。パノプティコンといえば、監獄を円弧に配置することで管理の効率化を目指すものだが、この病院では患者との身近さをもたらしただろう。もぬけの殻になった今も、誰かが見守っているような温かさが感じられるのだ。

聖ヨゼフ病院は旧海軍の「横須賀海軍工廠病院」として将長の家族のために開設され、戦後の46年に現在の聖テレジア会に運営主体が移った。その頃に建立されたのだろうか、扉上には、み子を抱いたヨゼフ像が横須賀の下町を見下ろしている。患者を見守り、街を見守った病院建築だった。

* 今回は12月13日